
FORGET FACE～忘顔～

84g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FORGET FACE（忘顔）

【Nコード】

N3097W

【作者名】

84g

【あらすじ】

いかなる種類の苦痛も快感に変換する塵機ナノ・ハートクリア精神外科手術。

だが、その技術は人間の正義と平和を破壊し、人間を全自動殺人機へと変えることを可能としていた。

小野寺翔太郎（仮名）は、塵機によって親友の命と己の記憶を奪われながらも、人類の自由のために謎の全堂電器を相手に戦うべく、敢然と立ち上がった！

果てしない炎の中へ

2月28日（木曜日） AM 11:13

——甘かった。

追いやられた物置の中、そう認識した時点で、彼らの勝ちは無くなった。

警戒はしていた。だからこそ相手の戦力が最も少ない日中を狙った電撃作戦を決行した。

一般の社員が多くいることも分かっていたし、装備も非致死性の麻酔薬や、スタン弾をそろえていた。あの男を捕らえるために。

「…生きてるか、翔一？」

「なんとか、ね」

ヘルメットの頭頂部からブーツの爪先まで、上下繋ぎのカーボン繊維の強化スーツには着色などは全く行われず、鉛筆と同じ真っ黒の炭素色。

唯一、色が違うのは視界を確保するために合成プラスチック製の赤いゴーグル部分だけ。マジックミラーの原理で外側から見ると赤だが、内側からはクリアに見える優れもの。

黒装束に頭部には、火のような赤い十字架型のレンズ、この制服ゆえに彼らは十字砲火クロス・ファイアと呼ばれていた。

今、会話をするふたりだけでなく、既に倒れ伏した数十人の隊員、全員合わせて対テロの最終兵器、クロスファイア：そのはずだった。全面ガラス張り、窓は六角形を多用した幾何学模様で作られ、日光の中ではそれ自体がカットされた宝石のように輝く。

二十七階立てのビルにはたったひとつの企業が入り、その社員の数は百人では利かず、彼らは自分の雇い主たちが裏で何をしているかもしらない一般人。

だから作戦が立案された時、チームの中で一般社員たちにはかなり高確率で危害が及ぶと訴えられたが、状況次第では社員たちを見捨てても、ターゲットの確保を優先するという非常指令が下された。故にこの任務はただの警察では後腐れを残す。それならば彼らクロス・ファイアだけでやるしかない。

「残ってるのは俺たちだけ、って感じだな。他は全員：“外された”連中だけだ」

無意識に彼は懷に手を伸ばすが、強化服の中にはタバコもライターも入っていないことを思い出し、相棒にも持っていないか聞こうとするが親友が嫌煙家であることは百も承知、諦めた。

「急がなきゃね、弦太郎：この作戦、失敗だ。もう僕らには全堂ぜんどうを倒す方法がない」

全堂ぜんどう全一、その男こそ今回のターゲットであり、この全堂電器の代表理事兼社長。全堂自身も科学者であり、販売されている商品の多くに彼の開発した技術が使用されている。

表向きにはただの科学者であり、その名前も事件の捜査中にはずっと上がって来なかったが、気付くべきだった。

誰かが気付いてこうなる前に止めるべきだった。“あの発明”が完成するより早く、全堂を拘束しなければならなかった。

「：クソ、腹立つぜ：これだったら二十年前、八手事件のときに証拠がなくても殺しておくべきだったんだよなあ：」

「冗談なんて云ってる場合かい？」

「そんな場合じゃねえよ、だから本気で云ってんだ。俺がそのときに居たら、捕まっても：」

云ったらそうしようと思っていたのだろう、翔一が相棒の顔面に拳を振りぬいた。

殴られた弦太郎はヘルメット越し、殴った翔一の方も強化服の上から殴っているため、痒いことはあっても痛くはない。

それを分かった上でも、殴られるという行為には相応の意思が感じられた。

「“彼女”を残して、君は捕まっていいい立場か？」

「：何様だ翔一：お前もそうだろ。捕まるとか死ぬとか、そういうのはナシだ」

分かってるよ、そう云わんばかりに翔一は先ほど殴った拳を解き、弦太郎へと差し出す。

弦太郎もその腕を取り、しっかりと手と手を結ぶ。

簡単に脱出はできないが、それでも彼らが諦めるわけがない。彼らはまだ“外れ”ていない。

こんな状況では、大して選択肢が多くないことが幸いする。迷ったり恐怖することもないからだ。

物置に立てこもっていても不利になることは確実。すなわち、もっとも適当な作戦は物置から飛び出し、ひたすら下を目指して階段を降りていくこと。間取りは頭に入っている、行くしかない。

「：これでふたりとも“外され”もせず、生きて出られたらちょっとした映画だな」

「そんな普通の映画じゃ誰も観に来ないさ、そうだろ？ 義兄さん？」

「：翔一、次にそう呼んだら、お前には親友に殴り殺されるっつーバイオレンス映画の主演男優賞な」

口調は乱暴だが、弦太郎の眼が笑っていることは赤いゴーグル越しにでも翔一には分かっていた。

ふたりは勢いよく、それでいて音も立てずにドアを跳ね開け、やはり無音で階段へと走る。

人通りの少ない階段を選びたいが、そもそもどこだろうと見張りがいるだろうし、それならば一番近い東側内階段を使うべき。階段から下の踊り場を見渡せば、翔一や弦太郎と同じクロスファイアの制服姿をした男が四人、しっかりと立っていた。

「：右肩に赤いマーキングと星型のマーキング：小野田翔一と寺井弦太郎：だな？」
ライゲンタロウ オノダシヨウイチ テ

「その声は：島本隊長っすか」

平静を装いつつも、弦太郎は内心で戦慄していた。

島本隊長も離脱できなかったんだ。外されて敵になったらしい。

「あー、弦ちゃん、今、隊長が逃げ遅れた、とか思ってるだろう。違うんだよな。島本隊長は俺たちを助けようとして遅れたんだよ。隊長の名誉のために云っておくけど」

その陽気な声に、翔一や弦太郎は覚えがある。同じクロスファイアのベテラン隊員で、翔一や弦太郎がクロスファイアに入ったときの歓迎会で、ひたすら男性アイドルグループの曲ばかり歌っていた男。

娘さんが大好きで、話題にしようと思えだしたら本気でハマってしまい、今では娘に呆れられるくらいだと一人で勝手に笑っていた。「お前たちは…どっちだ？ リミッターは…“外して” もらったのか？」

「ええ、もちろん。僕も弦太郎もさっき全堂さんに直接“外して” いただきました」

翔一は涼しい声でウソを吐いた。

リミッターはまだ付いたままだし、そもそも全堂になど会ってはいないが、外見上はそれを見分ける手段は翔一や弦太郎にはないし、島本隊長もそれは同じはずだ。

「…どこに行こうとしているんだ？」

「どこに…ってことはないんですけどね、ただ他に隊員が残ってないか、探してるだけですよ」

次に応えたのは弦太郎だった。ここさえ通り抜けられれば、なんともなる。

島本以外の隊員だったら、ウソを見抜かれたとしても勝てる自信と公算がふたりにはあった。

「そうか、それなら…試しておくか？」

島本隊長は無造作に隣にいた隊員、さきほど調子よく喋っていたジャニーズ好き隊員の肩を掴んだ。

「…え？」

本当に突然、意識する暇もなく島本隊長はその隊員を抱き寄せ、ヘルメットを外して首を締め：海辺で小さな貝を踏み潰したような音と共に、隊員の首を折った。

「…なッ…」

こんなことができるということは知っていた。島本の格闘能力、グラップリング特に絡技を考慮すればこれぐらいできて当たり前。

だが、隊長が。無愛想だが、それでも部下全員を無骨な父親のよう
に守ろうとしていた隊長が、先ほども部下を助けるために逃げ遅れた隊長がこんなことをするなんて。弦太郎にとっても翔一にとっても想像の外の出来事だった。

——これが“外された”、ということなのか。

「ほら、ふたりの…どっちでもいい、松村にトドメ入れろ。息はできているが文字通り虫の息。これも文字通りだが、息の根を止めるだけでいい。それだけで俺はお前たちを信用できる。お前たちはリミッターを“外して”もらった、ってな…そうだろ？」

そうだ、彼の名前は松村だ。松村麗也。娘さんからは『なんでお父さんはあたしに自分よりキレイな名前を付けてくれなかったの』、そう云われていたと愚痴っていた男だ：弦太郎の脳裏にはそのときの松村の楽しそうな表情が焼印のように張り付いている。

放置していてもこのままでは松村は死ぬ、そういう状態だ。だったら早く楽にしてやった方がいい。自分たちも死ぬわけにはいかない、簡単だ。いくらでもトドメの刺し方はある。

だが、弦太郎は動けない。即断できない。“外された”人間ならば嬉々としてできることが、何秒あっても決断できる気がしない。

「…じゃあ、僕がやらせてもらうよ？ 弦太郎？」

弦太郎の主観で果てしなく長い五秒。島本隊長たちの疑惑が巻き起こる一瞬前に翔一は前に出た。

いかにも“親友に譲ろうと思っていたが、やはり我慢できずに自分が出た”、そんな様子で。

「翔一…ッ？」

「もう遅いよ、僕がやる：譲らないからね、絶対に」

いつもと変わらない口調で、本当に楽しいゲームでもするようなテンションで翔一は云う。

だが、それでも弦太郎だけには見えている。赤いゴーグルの向こう側で翔一がどんな顔をしているのかを。

親友が自分の命を守るために、手を汚そうとしていることが痛いほどに分かっていた。

翔一はクロスファイアの標準装備のナイフを左手に構える。支給ナイフは両腕両用であるし、隊員はどちらの手でも扱えるようにならないければならないが、それでも確実に殺すために、とばかりのアクションで利き腕の左手に取りだしてみせる。

その上で、首元にジリジリと焦らすようにナイフを近づけていく翔一。弦太郎にはその姿は迷いを削っているようなしぐさに見えた。緊張からか、ふたりはある音を聞きそびれていた。真下からくる階段を昇ってくる音。

「：をを？　なんだ？　面白そうなこと、やってんじゃん？」

「へえ、なにしているんですか、私たちに内緒で」

現れた人物はふたり、そしてそれは弦太郎と翔一に、先ほど島本が松村の首をへし折ったときと同等の衝撃を与えていた。

ひとりは時代錯誤、というか、どの時代にも存在しないようなコスチューム。

改造してあると一目でわかるドレスのように裾を引きずって歩くセーラー服に下駄、首元にはこれも床に付くように長い黄色いマフラーをしており、大きく開かれたセーラー服の胸元にはサラシを覗かせる女性。だが学生には見えない。

年の頃はその辺りなのだが、下駄で底上げされた百八十センチ背丈とその瞳には世界全体を見下すように、全てを嘲るような自信に溢れた笑いが揺れている。

この女も充分驚く容姿をしていたが、一緒にいる男はそれ以上だ。二十代前半のそれなりの長軀に体格、単なる色眼鏡に黒のジャージ

：いや、服装はそうでもないが、この男こそ全堂全一、クロス・フ
アイア隊の標的だった男だ。

「全一殿、お疲れ様です。今はこのふたりが“外されているか”
を確認していたのですが：ちょうどいい、このふたりは全一殿に“
外していただいた”と云っているのですが、覚えは？」

この状況、翔一は自分たちの命が危険に晒される危機感に煽られ
ていたが、弦太郎は逆だった、標的の方からやってきた好機だと。
松村を自分や親友が殺すくらいなら、自分の命をかけて特攻：そ
の方が少なくとも弦太郎にとっては気が楽だった。

全一たちが知らないと言ったら、そのタイミングに島本たちと刺
し違えてでも、全一だけはなんとかする：そんな覚悟に肩透かしを
させるように脱力したように全一が喋る。

「覚えてないけど：っていうかさ、もういいよ、君たち」

「：は？」

「ここは拠点として使いやすかったんだけどさア。キミたちのせ
いでもう使えないからね、これから別のアジトにこの惑星番長ちゃ
んと一緒に移動するよ」

「それでは：我々は？」

島本隊長は一時前までは命すら狙っていた男に向けて、ひどく
萎縮していた。これが“外された”人間だというのだろうか。

だが、そんなことは関係ないとばかりに学生服の女、惑星番長は
掌を名前を思い出せないふたりの隊員の頭の上に置いた。

「面倒だから消えろや」

突然だった。ふたりの隊員が崩れた。

膝を着いたとか倒れたとかそういう意味合いではなく、シンプル
な意味で崩れた。

脱皮した蛹のようというか、服とヘルメットだけが残っており、
中身だけが消えている：否。

「灰：ツ？」

ヘルメットが取れた隙間から、線香を焚いたあとに残るもののよ

うな、キレイな灰が出てきた：状況的に、その灰がキレイなものではないことは誰の目にも明らかだが。

惑星番長は一言も発さず、静かに島本隊長の頭にも手を乗せる。

「逃げろッ！ 隊長！」

弦太郎の叫びは命を重んじる“外れていない”人間独特のものであり、自分たちがリミッターの付いている人間であると知らせている。

そんなことも考える余裕もなく弦太郎は叫んでいたが、それもむなしく、島本は反抗する様子もなく、前のふたりと同じように灰にしてみた。

「う：ぐ：」

「隊長…」

一切抵抗せず、安心しきった子供のようにあつさりと殺されていた。その様子は弦太郎の理解を超えている。

もちろん理解できないのは翔一も同じだが、彼は理解できなくとも動くという習性を生まれながらに持っている、そういう人種だ。

「弦太郎ッ！」

翔一は構えていたナイフを弦太郎に手渡し、自分は左右の太股にマウントしてあった電磁警棒^{スタンロッド}を、弦太郎は渡されたナイフと自前のナイフを逆手に構えて二刀流：それで向かっていくのではなく、階段を何段か登って距離を作る。

階段での戦闘では例外はあるが、相手の武器が不明なら上に行くべき——そんなセオリーな反応に満足そうに惑星番長はセーラー服を脱ぎ捨て、全堂に押し付けた。それはそのまま階段の下でそれ持って見てろ、そういうジェスチャーであり、全堂もそれは分かっている。

「いいじゃん、抵抗してもらった方が殺人、って気がする。さ、来なさい？ 俺は被害者なんかじゃないから気兼ねなく、ね」

その言葉に翔一も弦太郎も反応しない、明らかなウソだから。あれだけ簡単に人を殺しておいて被害者でないわけがない、それは全

一によって“外れて”殺人を犯した者の特徴。

無反応の意味を理解したのか、ただ喋りたかっただけなのか、惑星番長の舌は休まない。

「俺のは生まれたときからないんだよ。だから俺は被害者じゃない、純度百パーセントの加害者だ。安心して掛かって来い」生まれ付いて“外れ”ているのならば、それは先天障害なんじゃないだろうか。

だが、この女が生まれつきだろうとなんだろうと、翔一や弦太郎が手加減はしない、生きるだけだ。

2月28日（木曜日） AM 11:26

二十七階建てのビルの窓はほとんどが割れ、もうもうと黒煙を吐き続けている。

ビルの内部から出火：というか、爆発した。

周辺は警察が避難させていたが、そうでなければ落下するガラスで多くの怪我人、ひよっとしたら死者もでていたかもしれないが、それはもう確かめようがない。

消防隊が到着し、中に突撃するとその中には、多くの全堂電器の社員たちの死体はあった。

だがその死体はもちろんウェルダンになっていたが、死因は火に巻かれたせいではないし、惑星番長や全堂の手で殺されたわけでもない。

ある者は鉛筆で喉笛を貫かれつつも電器ポットで同僚を殴た状態で生き絶え、ある絞殺死体は別の死体を絞め殺しており、その被害者もまたもうひとりを絞め殺した状態で死んでいた。

互いに殺し合った阿修羅地獄で生き残っていたのは、東側内階段

の中で意識を失った男がひとりだけだった。

果てしない炎の中へ（後書き）

最終回、すげえ良かったです。

ただ、6月4日からの新番組は…白は良いけど、宇宙の鉄人っぽすぎるのがなあ…。

そんな作者です。云ってることが分からないようなら分からないままの方が多分幸せ。

覚醒

3月2日（日曜日） AM 2..33

夢というのは、寝る前に起きた情報の処理をするために起きるスクリーン・セーバー。

連想ゲームのように前日に有ったことから関連した情報が引き出されるが、その連想ゲームの途中を忘れて目を覚ますので、意味が分からなくなる。

この“彼”の夢には連想はない。強烈過ぎる記憶、それ自体を何度も反芻する。これは夢だ。

「お前が死ぬと“彼女”が泣く」

親友が自分の盾になるように立ちはだかるのを見て、“彼”の涙腺はとめどない。

少なくとも男には死ぬより辛いことがいくらかあるし、これもそうだ。親友は楽な方を選んだ。ふたりとも気持ちは同じだ。

「死ぬな、相棒、お前が死ぬことなんて…ッ」

涙なんて親友にも見せていなかった。いつも強がって“彼女”にも見せなかった涙。だがふたりにはそれより“彼女”の涙は見えない。

弦太郎も翔一も、形は違えど、同じ女性を愛している。そして彼女が親友に対して持っている愛情も知っている、だからこそ親友を殺させるわけにはいかない、自分が死ぬことになろうとも。

「ダチのために俺の必殺技にひとりで挑むか：イイねえ、男って感じだぜッ、殺すヤツってのは：そうでなくちゃならねえ！」

惑星番長は頬についた返り血を蛇のような長い舌で舐め取り、楽

しそうにその赤い唾を拳に吹きかける。

しかし、そんなことをしなくとも既に惑星番長の拳は血に染まっているわけだが。

「あばよ、ダチ公」

破裂した肺で繰り出した“彼”の叫びが喉を衝く。もちろん親友は止まらない、ただ力強さだけを増して。

「弦太郎ッ！」

「翔一ッ！」

「あー…楽しかった」

スカートが破れ、肩で息はしているものの、湯気が見えるほど温まった身体やランランと輝く瞳は、惑星番長の戦力が落ちていないことを意味していた。

「いやア、お前のダチ。本当に良かったわ」

“彼”の視線を全身に受けながら、惑星番長は満足そうに“親友”の首を投げ捨てる。対して“彼”は動けない、身動き一つ取れない。

「身体が動けば、俺に襲い掛かってくる、そういう態度だよな？
それ？」

「…ウッ」

口も回らない、血走った眼球は睨むこともままならない。それでも心だけは折れない、屈しない、命乞いもしない。作戦も使命も任務も関係ない、ただそうしたいと思うから。

「なら、俺の血をやるよ。略奪者^{ラオプ}の夢^{トラウム}を移した。栄養満点…俺の血だ。そのくらいの怪我なら絶対に治る。運がよければ」

惑星番長は、確実に“外れた”人間だ。殺人依存症。殺人を食事や睡眠、生殖のように生きるうえで必要だと認識する人種。

だが、プリンにマヨネーズをかける人間がいる、パジャマを着ないと眠れない人間がいる、服を着ていないとたたない人間も居る。

この惑星番長は無抵抗な人間を殺しても満足できない殺人狂、そういう趣味の犯罪者だ。

マヨネーズをかけないプリンなんて食べる価値もない、そういうことだ。

「後悔…させてやる…ぜッ」

体内で何かが暴れているのを“彼”は実感していた。

火傷で感覚が麻痺しているはずなのに、衝撃が直接脳を破壊する、それでも脳髄に、“彼”を待つ女の顔が浮かぶ。親友のデスマスクが思い出される。死ねない、絶対に死ねない…そして“彼”は眼を覚ました。

3月2日（日曜日） AM 4…13

妙な圧迫感のある部屋、そんなに広い空間ではない。

見覚えのない天井。嗅いだことのない匂い、目や二を取ろうとするが、彼の腕は上がらない、彼の両手両足に巻いてあるのは材質は分からないが、かなり丈夫なバンドらしく、さらに顔面には真っ白の包帯が巻かれている。誰かに呼ばれた気がした。

誰かに呼ばれて目覚めた

ここがどこかは簡単。病室だ。窓にカーテンが掛かっているせいで今が何時か、どこの病院かは彼にはわからないが。

「気が付いた？」

《大丈夫：》

妙に甲高い声に驚いたのは彼自身だった。聞き覚えのない歌手のような声。自分の声はもつと……とにかく別の声だった気がしていた。そんな“彼”の狼狽を聞き流し、病室に入ってきた女性は“彼”を見下ろすように枕元に立った。

「声がおかしいでしょ？ まあ、気にしないで？」

奇妙な感覚に襲われていた。“彼”は自分の声がおかしい理由を知っている気がする。

絶対に知っている、うろ覚えだが“彼”はそれのために病院の世話になった、そんな所感。

「質問があるんだけど、聞いて良い？」

《すみません、その前にバカな質問だと思うかもしれませんが、ちょっとだけ聞かせてください》

「：？ 何？」

《ジブンは、誰なんでしょう？》

そうなのだ。“彼”にはここがどこであるかとか何日眠っていたのか、それよりも大事なことがあった。

自分が誰なのかが分からない。哲学的な意味合いではなく実生活的な意味で分からない。

小麦粉を水で溶くときは器に先に小麦粉を入れて水は後。仕事の基本はハウ・レン・ソウ。カーブなんていくら練習しても三塁側に折れやがる。切れたイヤホンはハンダ付けしても長持ちしない。

男子便所の小使用では既に使用者がいればできるだけ隣は使わない。ラーメンをカウンター席で食べるなら最高の席は左端。世界で一番面白いマンガはドラゴンボール。暑い日はタオルを持って歩く。そんな“彼”の中での常識は思い出せる、だがそれ以上の情報が思いだせない。

自分自身の一人称が『私』なのか、それとも『僕』や『俺』、下手したら『あたし』や『オラ』としても否定できないほどに自信が

持てない。

「…ちよつと待って…？ 私もあなたに…同じことを聞こうと思
つてたのよ？」

Q&Q、互いに彼が誰であるかを知らない、それが彼と彼女の初
対面であり、再会だった。

そんな中でも、“彼”は誰かに呼ばれている実感を持ち続けてい
た。

覚醒（後書き）

序章って言うておいて、続編を作らないってマジでやめて欲しい。
：とにかく、俺、忘顔は書ききるんで、そのあとに色々と片付けるから、さ。

FORGET MEMORIES

3月2日（日曜日） AM 4:27

過ぎ去りし過去、千九百三十五年。

とある男が好奇心という神に従い、一匹の猿で実験を行った。

まずは頭の毛を剃ったが、坊主頭が見たかったわけじゃない。

次に肉を切ったが、サルのガイコツが見たかったわけじゃない。

そして骨を割って脳を露出させたが、猿の脳味噌踊り食いが出たわけじゃない。

もっとシンプルに、脳における理性と本能を司る前頭葉を取り除きたかった、取り除いて猿が生きていられるのかが知りたかった。

猿は死ななかった。それどころか、チンパンジー独特の凶暴性が無くなり、それは外科手術によって人間性の矯正ができることを意味し、すぐに人間への転用が研究され、人格の改変が実際に行われた。

魂は存在するのだろう。しかしそれは二キロに満たない肉の塊に付随する幻のような存在でしかないのかもしれない。

それから長い年月が経過し、過去として風化した頃、静かに世紀末へと近づいていく。

人類は未だに多くの問題を抱えながらも未来へと邁進する人類に訪れた次なる危機、それが全自動殺人機事件オートマテックス・キラーだった。

脳のちょっとしたバランスのせいで人間は苦しむ。どんな言葉で隠しても苦しみは止まない。

だから止めた。ストレスが多いならノルアドレナリンを抑えるた

めにシナプスを“調整”すれば、どんなストレスも感じない。

自己嫌悪に陥るようなら、その部分の脳を鋭敏にするか鈍重に“調整”さえすれば、望むとおりの自分が手に入る。それこそ己を磨いて自分が待ち望む真の自分、すなわち神へと至る術。空手道が、仏教が、恋する乙女が、アスリートが、自己啓発セミナーが、皆が目指した完成形、それこそが…。

《塵機精神外科手術？》 ナノ・ハートクリア

拘束のバンドを解かれてから、両手に箸を構えて“彼”は病院食を玉入れ競争のように口に放り込んでいく。しかしそれでも喋ることを苦にしない、口に入ると同時に米も漬物も煮物も消えているように飲み込んでいる。

既に何人分食べたか分からないが、食べるのをやめると更に不安になっていく。自分が何なのか、何をすべきなのか、それすらもわからないまま。

「そう、塵機^{ナノマシン}で脳を最適化する新技術…ああ、塵機っていうのは小さい機械。バイキンより二回りか三回り大きいくらいで…」

《ニワトリのような機械。そのニワトリは雑食でなんでも食べて卵を産む。その卵からは親と全く同じ姿に成長するヒヨコが生まれる…？》

女医の説明を遮って、箸を置いた“彼”が淀みなく呪文のように言い切ったそれはアセンブラ・ナノマシンの基本的な説明であり、大好きな歌を口ずさむように自然に出ていた。そういう切り替えしをされれば、女医も月並みな補足を付け加えるだけ。

「そう、まさにそう。塵機^{ニワトリ}は周囲の原子^{エサ}を食べて、自分と同じ卵^{コピー}を作っていく構築者^{アセンブラー}、だから倍々で増えていく」

この説明に“彼”は納得、というより既に知っていたわけだが。さらに注釈するなら構築速度とは、その鶏が卵を生む速度のことだ。

自分と同じものを組み上げるのに一時間掛かるなら、一時間で二体、二時間で四体、三時間で八体、となる。

ちなみに完全なアセンブラーとして世界で始めて開発されたものはフォトンエッジと呼ばれる光の刃でナノより細かいピコという単位で構築しており、それは自分自身を複製するのに十一ヵ月を要した。

「あなたが所属していた特務部隊は塵機精神外科手術の開発者、全堂全一の確保が任務だった…そう聞いているわ」

《ぜん…どう？》

“彼”は忘れてしまったが、忘れてはいけない名前だったことだけは理解している。

その名前を聞けば、名状し難い憤りが胸の奥から込み上げてくるが、その感情とは別に、“彼”の理性は女医の奇妙な一言を聞き逃さず、次の質問を選んでいた。

《あの。どうして、ジブンがそのクロス・ファイアの隊員だと？ジブンが誰か分からないんじゃないんですか？》

「発見時の状況よ。あなたはクロス・ファイアの制服を着て倒れていた。個人識別用のマーキングは爆発で吹き飛んでいたけどね。

それに焼け残った監視カメラの映像では改造セーラー服の女が他の隊員たちを何らかのナノマシン攻撃で殺害、小野田翔一と寺井弦太郎との戦闘になっていた。状況証拠的にあなたはそのどちらか、ということになるわ」

オノダシヨウイチ、テライゲンタロウ。それらの名前に“彼”は自嘲気味に笑っていた。

完全に知っている名前、他人ではない名前、だがそれでも思い出せない自分の滑稽さ。

女医は病室備え付けのロッカーから紙袋をふたつ引き出し、そこからいくつかの財布やカード入れを取り出し、食べ終えた病院食の隣に置いた。

キーチェーンで鍵やストラップがジャラジャラと付けられたもの

と、それとは対照的に何も付いていない物。女医はそこから一枚ずつA4サイズの紙を探し出し、“彼”に手渡した。

寺井弦太郎

身長…176センチ

体重…81キロ

血液型…O型

満年齢…31歳

誕生日…11月25日（庚辰）

隊員番号…CF―て20964

小野田翔一

身長…176センチ

体重…78キロ

血液型…AB型

満年齢…25歳

誕生日…7月10日（丙戌）

隊員番号…CF―て20512

顔写真の張ってあるしつかりとした診断表。バーコードや刻印、読み方の分からないようなマーキングも多い。

健康診断か何かの書類らしいが、“彼”はその二枚の写真にはもちろん見覚えがあり、そこで気がついた。

《…ちよつと…待ってください…？　どうして、ジブンが誰か、分からないんですか？　こんなにしつかり分かってるのに？》

確かに身長や体格は近いものがあるが、それでもしつかりと計測すれば違いあり、血液型すら違う。

爆発から救助されたとしたら、怪我の治療のために血液型だって

調べられただろう。それだけでどちらかなんてわかるはずだし、それ以前に顔だって雰囲気から違う。

弦太郎の方は屈強健全な額に傷のあるしょうゆ顔、翔一の方は清潔そうな黒髪的美青年。顔の系統が全く違う。

「：説明が遅れたのはごめんなさい。でもね、まずは落ち着きなさい」

云われるままに深呼吸をしてから、“彼”は自分の顔に触った。包帯が巻きつけてあるのはわかったが、包帯越しに顔のさわり心地がおかしい。マネキン人形を触っているようで。

困惑する“彼”を差し置いて、女医は手馴れた様子で包帯を解いていく。

「鏡はこっちにあるわ、落ち着いて見なさい」

病院の個室に備え付けられたバスルームの洗面台に招かれ、“彼は見た。そして触れた。”

自分の顔に見覚えはない、写真とも違う、誰でもない、それどころか人間ではない。肉ですらない金属製の工芸品、ホラー映画で見慣れたその形：“彼”は絶叫し鏡を叩き割っていた。

興奮したまま放った一撃は、鏡を洗面台ごと叩き割っている。壊れた水道管の噴出した水がシャワーのように降り注ぎ、熱くなった“彼”の頭に降り注ぎ、そのまま秒針が刻む音だけを聞いていた。

いつの間にか離脱していたのか、部屋の外から静かに見守っていた女医に、“彼”は人で無くなった眼を向けていた。

《なんなんですか、“これ”はッ：？ ジブン、どうなってるんですかッ？》

「：実はね、あなたのことを誰も治療していないの。発見された時点で怪我なんてなかった。最初からその姿だったの」

《そんなバカな！ 大きな爆発だったんでしょッ？ 何人も死んだ。そんな中でどうし：て：？》

心身を問わず、いかなる傷をも治せる治療方法。それを破壊することが自分たちに課せられた使命。

分かっている、それを許さないために自分たちは命を懸けた。

「もう二十年くらい前の話。ある家族が居たわ。祖母・父・母・息子ふたりの五人家族：色々な問題を抱えていたんだけど、その家族の問題は即座に解決されたわ」

包帯を頭に巻き直しながら呟いたその名前はぼやけた脳でも思い出せる。

《最初の：塵機精神外科手術の実例、八手一家事件：ッ！》
ナノ・ハートクリア

根深く記録されている。それはひとつの家族を破壊：いや、完成させ、そして世界を揺るがすことになった事件だった。

色々なことが起きすぎて、既に“彼”は自分が何を考えればいいのか、何を考えているのかすら分からなくなっている。

頭は冷えている、生身の頭だったときとは比べ物にならないほどに冷えている。だが頭の中が片付いておらず、おもむろに窓へと向かい、カーテンを思いっきり開けた。

空を見たかった。青空でも夕暮れでも星空でも、極端な話、雨風が吹き荒れる台風の空でも良かった。

だが、これは予想していなかった。ミリタリーカラー軍迷彩色の戦闘ヘリが、無音でホバリングしているとは。

「え：ッ」

引き伸ばされた一秒。感覚だけがヘリで運搬されている五人の姿を“彼”に察知させた。

一人乗りのコクピットで運転手として笑顔の可愛い赤い服を着た中年女性が操縦し、本来はそれで定員ちょうど。

本来の戦闘ヘリはひとりで運転しミサイルを放つ強襲兵器だが、今はミサイルポッドの代わりに、ジャングルジムで遊ぶ子供のような体勢で青・黄・桃・緑色のライダースーツを着た老若男女がぶら下がっている。

《止まるなッ、ヒトミッ！》

ヒトミという名前がなんなのか分からないまま“彼”は叫び、それを合図にするように例のカラフルな四人が主翼を軸に病室へと飛

び込んできた。

これで窓を破って入ってくるのではなく、当然のように病院の壁を発泡スチロールのように蹴り、あるいは体当たりで破り、平然と入ってきた。

その四人を端的に表すなら、青いスーツの色の白い兄ちゃん、黄色のスーツはガラの悪そうな兄さん、ピンクのスーツの優しそうなおばあちゃん、緑のスーツにネクタイを締めた中年男性…というか、ご家族連れにしか見えない、お父さん、おばあちゃん、息子ふたり。

《八手一家…だな？》

「有名だね、俺たちも」

八手一家、それは日本の“どこにでもある”平凡な家庭だったが、全堂全一によって世界一有名で、“幸せな”一家に改造された家族の名前だった。

FORGET MEMORIES (後書き)

この前最終回になったヤツ。

あれの最強コンボはデンゲキ・イナズマ・ネップウ、だと予想してました。10号的な意味で。

分からない人置き去りですよ。

東京ジャングル

二十年前 9月6日(日) PM5..18

――八手楓は、日曜日が嫌いだ。
やつでかえで

「…楓さん、何か手伝いましょうか？」

「いいえ、休んでいてください、お義母さん」

収納が多く、二十一世紀的で広いシステムキッチン。

どんなに小さな家でも、主婦がひとりで清潔を保つには限度があるが、ここはそのせいだろうか、部屋の片隅にはゴミ袋が積み上げられ、野菜のカスや茶色い調味料が粘つく床や壁に張り付いている。

そこで八手楓は、五人家族の分の夕食を作っていた。メニューはミートソーススパゲッティと肉じゃが。

食べ合わせも良くない上、材料がダブっておらず、やたらに手間が掛かるメニュー選択。肉じゃがは夫の好物、ミートソースは二人いる息子の好物。

「ぶーん、ぎいーんっ」

息子が楽しそうに、去年放送百周年を迎えた変身ヒーローの、光って鳴って回る変身ベルトで遊んでいるのが聞こえる。

かなり前に買い与えたオモチャだが、壊しもせず、大事に遊んでいる。

「ねえ、楓さん、ご飯、あたしがやろうか？」

「いいえ、本当に大丈夫ですから。お義母さんは…おおあき大秋の相手を
していてあげてください」

いつもと同じ、優しい姑との会話だった。毎日のようにしている会話。手の掛からない長男に比べて、手の掛かる次男の遊び相手をしてくれればそれで助かる。

姑は七十歳間近とは思えない、キレイな曲がりも短くもなっていない足腰で大秋のいるリビングにリズムカルに歩いていったのを確認し、楓がスパゲティの鍋に意識をやると、携帯電話が鳴っていた。会話の方に意識をやっていたせいか、着信音に気付かなかったらしい。発信者の名前を見れば【お父さん】となっている。夫の八手秋信だ。リダイヤルで掛け直すか、それとも直接行くか。迷っている間に、またも姑が台所に顔を出した。

「…楓さん、お昼ご飯、あたしが作ろうか？」

今、楓が作っているのは夕食…だが、間違いを指摘してはいけない、姑の基本中の基本だが、だからといってなんと云えばいいだろうと考えている間にドタドタと走ってくる気配。

「あ、ああああーッ！」

細身の足をハーフパンツから覗かせて、変身ベルトのオモチャを片手にやってきたのは次男。

手間が掛からないように保護者の都合で短く刈りそろえた坊主頭、そして祖母どころか母親の楓よりも既に大きい…身長百八十センチ、十七才の大秋は、何が不満なのか変身ベルトの効果音と一緒に泣きじゃくっている。

そんな彼の頬に、先ほどまで笑顔で昼食を作るといった姑の平手が飛んだ。

「静かになさい、秋信ッ！ そんなに煩くすると裏山の刑務所に入れてもらうわよ！」

今住んでいる家に裏山なんてない。そもそも自分が今叩いたのは息子の秋信ではなく、孫の大秋だということももちろん姑は気付いていないし、叩かれたぐらいで泣き止むくらいな大秋ではなく、自分がなぜ叩かれたのか分からないまま声変わりも終わったハスキーボイスで泣きじゃくる。

そんな中、再び鳴るのは楓の携帯電話。発信者はもちろん夫の秋信。隣の部屋からの呼び出しだが、用件は分かっている。トイレに行きたいと云うのだろう。

泣き叫ぶ姑と次男、声を出せない夫の代わりにメール通知を知らせる携帯電話。唯一静かなのは二階からトイレ以外では降りてこない長男の信介だけ。

吹き零れるスパゲティの鍋、香ばしいを通り過ぎて焦げ臭い肉じやが、騒々しい家族たち。

「あああああああああああッッ！」

——それらを掻き消すように、楓も無意識に叫んでいた。

日曜日はだから嫌いだ。姑のデイサービスも息子の養護学校も休みで、それに合わせて取っている自分のパートも休暇、決して休まることのない自宅。

月曜日まで、夕食時さえ乗り越えれば、あとは……あとは、まだ家族たちの排泄が残っている。食器の後片付けや姑や息子の明日の準備だってある。

自分が何をしたというのだ。朝から晩まで働いて、家族に奉仕し、なぜここまで苦しまなければならぬのだ。

長男が引きこりになるように育ててしまったこと？ 息子を障がい者に産んだこと？ 将来交通事故で脳に障害を残すような男と結婚したこと？ その男の母親が認知症を発症したこと？

「八手：楓さんですね？」

そんな騒音を鎮めたのは、服を着ているのではなく着られているという表現がよく似合う、黒光りするスーツに身を包んだ薄っぺらそうな若者だった。

彼は携帯電話の電源を切り、台所の火を止めただけだったが、慣れない人物に興味が移った大秋が泣き止んだ。大秋が泣き止めば姑も騒ぐ理由はない。

「……あなたは？」

「失礼。何度もチャイムを鳴らしたんですが……中から声がしたので、失礼とは知りつつ上がらせていただきました……失礼しました」
使い慣れていない敬語に続き、彼は出しなれていない名刺を差し出した。

「…ゼンドウ・ゼンイチさん、ですか？」

「ゼンイツ、です。お間違えないように…」

不信そうに疲れた目を向ける楓に、全一は懷から出したA4用紙に目を向ける。

「八手一家：旦那さんの秋信さんは交通事故の後遺症で半身麻痺：言語障がいもあり、動くのは右腕だけ：しかも調子が良い時だけ。

長男の信介さんは、理由は分かりませんが、中学校の頃から引きこもりで現在二十六歳。もうひとりの息子の大秋くん：彼ですね、彼は先天性の発達障がい、精神的に未熟。

そちらにいるお婆様は、アルツハイマー型認知症で要介護四で、施設入居を申請しているものの、コネもカネもなく待機状態：楓さん自身も私の見立てでは躁鬱の風がある」

「それが…なんなんですか…」

抑揚もなく、楓の言葉には感情が乗っていない。どこかに置き忘れてきたように。

「私はちょっとした研究をしております、その研究に付き合っていたきたいのです。八手ご一家に」

どんな研究？ と楓が聞き返すのを待っていたのだろうが、楓は何事もなかったように肉じゃがとスパゲティに戻ろうとしている。

「…仕方ありません、それでは…お見せしましょう」

無遠慮に全一は利き腕の左腕にタマネギを刻んだ包丁を拾い、自分の右腕に突き刺した。

当然のように血が飛び散り、息子と姑が再び泣き叫ぶが、全一も楓も気にしない。

「私の研究は塵機。こんな傷ならばア…ッ」

包丁を抜いた後には、血の一滴も流れておらず、スラックスにも穴は開いておらず、ただただ包丁に血が付いているだけ：奇跡というより、出来の悪いテーブルマジックのような雰囲気だ。大秋くん爆笑中。

「ハイッ、元通り」

大秋くん、姑さんからいびつな拍手が送られ、全一も得意げに笑ってみせる。

だが、当の楓はそれがどうしたといったように炎を見つめ、料理を再開している。

「この治療用塵機は、使用者の脳を読み取り、周囲の元素を分解し、望むように修復します…従来の治療では不可能だった脳に関する治療も可能です」

「…え？」

肉じゃがをかき混ぜる手を止め、楓は振り返った。

「もちろん人体実験です。危険も否定できませんが、どうしても必要な実験なんです…どうでしょう？ 八手さん？」

「危険って…えっと…」

楓は想像できなかった。今より悪くなる状況が。

全面的な介助が必要な家族を三人抱え、何もしない家族もひとり抱え、健康的にも金銭的にも時間的にも精神的にも、全てが限界である今。

無邪気に笑う大秋や義母の顔を見ると、幼かった頃のもうひとりの息子の顔や元氣だった旦那の顔を忘れられず、心中すらできそうにない自分い幸せになる方法なんてあるのか。

死んだって良い。挑戦して終わるんだったら納得できる。家族の誰だろうと、自分だろうと。

「…お願い、できますか？」

ただ、静かにガスの火と全一の笑顔だけが揺れていた。

二十年後 3月2日（日曜日） AM 4…58

ヘリコプターを乗り捨て、四人の家族たちに続いて楓も病院へと降り立った。もちろん壁に穴を開けて。

「ヤツデレッド、八手楓ッ、妻ッ！」

「ヤツデブルー、八手信介ッ、長男ッ！」

「ヤツデグリーン、八手大秋ッ、次男ッ！」

「ヤツデピンク、八手ペに、祖母ッ！」

「ヤツデグリーン、八手秋信、旦那ッ！ 五人揃ってえっ」

五人とも実に元気一杯、自信満々、レッドを中央に置き、左右のふたりずつが鏡写しでポーズをとり、次々と自分の名乗った色と同じヘルメットをかぶり、最後に五人でハモって。

『八手戦隊、カシオペアッ！』

全員が背筋を伸ばし、バシッとポーズを決めているが、そんなことは関係ないとばかりに

《八手一家：か》

「：あれ、キミ、記憶喪失とかだったんじゃないの？」

そう云ったのは緑色の八手大秋。快弁な口調で、明確に意思を聞き取れる言葉である。

発達障がいにも色々あるが、少なくとも二十年前の大秋にはできなかったレベルの発言である。

《お前たち、ジブンを知っているのか？》

「こっちの質問に先に応えてくれないかのお、若いの、どうなんじゃ？」

次に答えたのはピンクのおばあちゃん。アルツハイマーは会話することもできるが、ハッキリ云って発病から二十年経ってここまでしっかりと歩けるというのはありえないと断言して良い。

というか、それは他の家族も同じこと。ふたりの息子はまだ若者という年齢で父母も中年を維持。老人というには若すぎる。

《：記憶はない。だから次はジブンの質問に答えてくれ》

“彼”が包帯に指を付き立て、目元の部分を剥ぎ取る。

そこには真っ赤な眼があった。充血しているわけではない、それどころか血すら通っていないふたつの瞳。

「なにが？」

《お前たちに対する…この全身に纏わりつく様な感情は…なんだ？》

紅玉のレンズ、平べったいルビー、そうとしか云えない眼が鏡のように五人のカラフルな一家を映していた。

女医は何かを云おうとするが、それが誰も救えないことを思い、留まった。

「それはアレだよ、俺たちが…怖いんだろお？」

《…違う》

「遠慮するなって。怖いんだったら消えてやるよ。なあ、みんな？」

そうだな、と云わんばかりにグリーンの大秋の言葉通りだ。靄が掛かったテレビというか、モザイク画像のように背景に一体化していく。

白い靄もやが見える。

《…ヒトミツ、あれはなんだッ！》

再び“彼”は女医の名前を呼び、女医は白衣の裾を握りしめながら記憶を呼び覚ます。彼女の専門、塵機チンキによる現象だ。

「臨界自由状態…塵機チンキ接続を解いて、空間に拡散する…塵機応用のひとつで、塵機保持者の基本」

——ああ、そうだ、オーバーフリーだ。クロスファイアの隊員としての教習でやっている。

小学生の頃に習ったどうでもいい化学実験の結果を思い出したような感覚が“彼”に訪れる。そして続いて包帯を解いた顔面に激痛が走る。

完全に死角から、唐突な攻撃。胴体もなく空中に浮かぶ青いライダースーツの腕は完璧に振りぬいており、その下には赤い仮面のお母様、その首だけが浮いている。

「散布した塵機を任意の場所で再構築、これ、塵機保持者の基本」
コロニー

《…そうだったな、思い出した》

「じゃ、思い出したところで死んでおくれ、若いの」

地面にもんどり打った“彼”が次に見たのは、氷柱のように天井に釣り下がる十の手首と十の足首。そしてそれを操るように五つのヘルメットを被った生首も宙に浮かぶ。

手品で手足が離れたり、胴体が切れたりすることはあるが、なるほど。手品師というのは塵機保持者だったのか。

『必殺、ヤツデストームッ!』

楽しくトランプでもやる家族連れか、お前たちは…“彼”がそう思おうとなんだらうと、とにかく振ってくる二十の首。

その拳足は一撃で病院を強震、二撃で病院を烈震、三撃目で激震…あとは既に揺れられない。揺れが伝播する前に超振動となり床を粒子に砕いていく。

ちょうど彼らの居た階の床を消滅させたとき、ベッドや机と一緒に“彼”の姿も消滅していた。

吹き抜けのようになった空間の中、五つの生首からは下の階まで落下するまでに急ピッチに胴体が生え、やはりヒーローのようにポーズも決める。

「オイオイ…ちょっと待てよ…殺しちゃったんじゃないか？ 母さん？」

彼らが落下した先は、病院のホール。

まだ朝が早い、それでも医者や清掃員などの従業員、入院患者が詰めており、先ほどの八手一家の攻撃の振動で身を伏せていた人が大勢居る。彼らは八手一家の登場に先ほどの揺れ以上の恐怖を感じていたことだろう。

“彼”ならばこれぐらい避けられると思って使っちゃったけど…まあ、良いんじゃない？」

「良くねえよ！ 俺、頭が減ってるんだぜ？ せっかく食えると思っただのに…これじゃあよッ！」

頭が減る。その表現を待つわけがない。病院のホールはナチュラルで凡庸なパニクに陥っていた。全員が出口を目指すようなヤツ。体中を塵機に分解できる彼ら、塵機保持者のことをコロニーと呼ぶが、この由来はその特性に有った。

例えば、海中のサンゴなどは無数の微生物が結集して一体を形成するが、これに近い。

微小な塵機ひとつひとつが全ての人生記憶とDNA・RNAなどを記録し、量子リンクによって全ての固体が情報を共有。全は一、一は全を比喻表現ではなく、地で行く存在になる：それだけだと思われていた。

「オーバーフリー臨界自由状態したからね、まあ：一緒に食べましょう？ 大秋」母親の言葉を待ってましたと、大秋は両腕をナノマシンにほぐし、ゴチソウの周りで再構築する。そこには入り口の自動ドアに虫のように張り付いた病院関係者たち。

塵機は周囲の物体を分子レベルまで分解、そして自分と同じ塵機を複製する。そのため、一秒前までは全く別の存在だったものが、自分と全く同一の存在にする。元になる物体が何であろうと複製された塵機はオリジナルと全く同一になる：はずだった。

だが何かが違った。何が違うのかは分からないが、とにかく何か違った。

「お前の記憶は：どんな味だあ？」

病院中に悲鳴と靄が充満している。全員で臨界自由状態になった八手一家の塵機でちょうど湯気と霧の間ぐらいの白さ。

塵機保持者は、塵機の循環によって性格や知能、身体能力のパラメータを変動させ、成りたい不老不死の自分自身となる。

カルマから羊を解放し、原罪さえも御釈迦にできる全人類を聖人とする計画だったが、その破綻に最初に気付いたのは家族で実験体となった八手一家。

生きた人間を分子にほぐし、塵機として一体化したときに発生する、奇妙な充足感。殺人症候群。

——誰を食おうかなッ！——

——待て待て。最初は婆ちゃんと父さんだろ？——

——構わん、大秋、好きに選べ——

——わぁーッ、どれにしよう——

殺人症候群に、人類は思い出したように戦慄した。

食事や睡眠や生殖からも自由となった塵機保持者たちを、人間と証明する方法を誰も持っていないことを。

殺人への葛藤も、罪悪感も、嫌悪も、全ての感情を消し去り、ただ人間をほぐして食べるという代替のできない快感だけを求める怪物が生まれていた。

一般人が咽び泣く声や、八手一家の塵機コーティングによって強化された窓ガラスを破壊しようとパイプ椅子でたたき続ける音が響く病室。彼らは次の瞬間には自分が塵機に分解されて消える恐怖に晒されていた。

一秒々々が長く感じる。一分が一時間にも感じられる。そして二分が過ぎたとき、八手一家の四人が気がついた。

——…？ どうした？ 大秋、食べていいんだぞ？——

品定めをするにしても長すぎる。次男の大秋が塵機同士の無線通話がない。八手一家は誰からともなく臨界自由状態を解く…というか、固まる。塵機同士を寄せ集めて一個に戻った。

「…大秋ッ！ どうした！ 食事中にふざけるのはやめなさい、一度、集合しなさい！」

四人とは距離を置き、脱出すべく玄関ホールに集まった人々の近くに“彼”は出現した。

ヤツデグリーンの大秋ではない。ヘルメットにしては小さすぎるその頭、しかし素顔にしても異常すぎるその頭。

肉も皮も髪もなく、代わりとばかりに光沢と透明感のある黒い頭蓋骨。その眼窩には目玉はなく均一に伸ばしたルビーのような板が蓋をしている。

もちろん“彼”だ。記憶と共に顔すら失った男。

「…お前：大秋をどうしたッ？ いや、それ以前に：死んだはずだッ！ 私たち家族のヤツデストームでッ」

二番目の答えは分り切っている。“彼”は今、無数の塵機から人の形に戻った。攻撃を受けるより前に自ら臨界自由状態になり、打撃を避けるだけでいい。

《…お前らの家族は：ジブンの中にいる。ジブンが取り込んだ》端的に云った“彼”の言葉を理解したヤツデレッドこと母親の楓がぐらついて倒れそうになるが、すんでのところ自分でバランスを立て直し、大きく息を吐いた。

「ふーん、そう、大秋が消えたの。でも、あなたは大秋を取り込んだときに大きく消耗したはず：それであたしたち四人に勝てるかしら？」

《…お前たちは、息子や孫や弟が消滅させた：ジブンを恨まないんですか》

「恨む？ 先に殺そうとしたのは我々なのに？」

「既に悲しいという感情や、大秋に対する愛情は消去している：そんなノスタルジイはないよ」

ひとり減ったヤツデ一家は最初からそうだったように四人で平然と拳を構え、ポーズまで揃っている。

悲しみも後悔も、何もない。ただ当初の予定通りに“彼”を始末するだけ。

《それも惑星番長の命令か？ それだけが最大の満足を得るように調整された塵機だと：分かっているんだろう？》

「ああ。分かっているさ。惑星番長たちに従うことが最大の満足最大の安心。それに疑問だと思うような下らない感情はとくに消去したよ：ところで、お前のこと、なんて呼べばいい？ 名無しじや面倒なんだが」

今死んだ弟のことより、目の前の敵の名前か。

塵機保持者は、苦しむことはない。それが幸せだと思っているから。

《…そうか、お前たちは…家族を奪われても泣けず、自分が消えても涙を送られないことを…幸せだと云うのか…ッ》

「辛くないからね、不幸じゃない。だから幸せさっ」

《ならばッ！ ジブンのことは…小野寺。
オノデラ ショウタロウ
小野寺翔太郎とも
呼べ》

小野田弦太郎でもなく、寺井翔一でもない“彼”は、親から付けられるべき名前を自分でつけるしかなかった。

東京ジャングル（後書き）

最終回が9月3日までに上がるかが微妙。

今日中に仕上げられないと、もう本来は起承転結の転に当る部分を結にすることになりそう。

夢の流れ星

2月27日（水曜日） P M 2 : 5 9

お日様が強すぎて空を見続けられない、だがそんな空だからこそ見ていたい。

これだけ暑くても光化学スモッグも発生せず、乾いて死ぬ前には自動販売機でいくらでも水が飲める。

こんな日は布団代わりに敷けるダンボールだけ持って川原で昼寝、それが一番の贅沢。

だが、彼らは残念なことに、クーラーのしつかり利いた部屋にやってきた。上でも下でもどこを見ても目が眩まない適度な仄暗さ、その部屋の中で、彼らは透明のアクリル板の向こうにいる知り合いに、汗を拭いながら笑いかけた。

「こんにちは。志郎さん」

「今日もお疲れさん、今日はふたりで来たのか？」

志郎と呼ばれた壮年男と、彼らふたりはとても似ていた。

顔や体格という意味ではなく、衣類に隠された傷跡はペアルック、痕も残さず消そうと思えば消せたかもしれない、だがそんなヒマは彼らにはなかったし、傷を恥と思う職業でもない。

「ええ、志郎さん：今日、全部終わります。終わらせますから、その挨拶に」

応えたのは、一層背の高い男だった。自分の汗にも負けないほどにガッチリとポマードで固めたオールバックは、額の一文字の傷を晒すためにやっている。

その傷が誇りであり、自信である。そう云わんばかりの挑発的な面構え。寺井弦太郎。

隣に腰を掛ける男は涼しげにスーツを着こなし、テレビに出てい

ても違和感はないが記憶には残らないくらいに整った青年、小野田翔一。

「無理するな、って云ってもお前らはやめないんだろうな。特に翔一は」

「嫌だな、志郎さん。僕、無理なんてしませんよ。弦太郎じゃないんですから」

「お前は他人には分からないように一人で抱え込むからな。その意味じゃ命懸けでも分かりやすい弦太郎の方が楽なんだよ」

気兼ねせず、いつものように志郎はタバコとライターを取り出し、堂々と吸っている。

以前と全く変わっていない志郎の姿に、ふたりは安心したがっていた。だができないのは分かっている。彼の状態がわかっていいるから

「…やっぱり、駄目なんですか？」

「ああ、完全に“外れ”てるらしい。もう全身が塵機に置き換わってるしな」

翔一の問いかけに、言葉と共に左手に持っていたタバコを分解して消してみせる志郎。

塵機保持者として、塵機をかなり使いこなしている証拠だった。

「なんとか…ならないんですか。なんで志郎さんが…！」

「どうにもならないだろうな。もう俺はお前たちの知っている風間志郎じゃない。ただ単に風間志郎の記憶と情報を持った塵機の固まりだからな。殺人衝動がキテる」

「…全堂への絶対忠誠を仕込まれる前に逃げたのに…助けたのに…なんで、なんで殺人衝動はあるんだよ…それさえ…それさえなければよ…ッ！」

弦太郎は既に泣き出していた。それをいつも慰めていた志郎とは既に壁一枚を隔てている。生物的にも物理的にも。

「全堂たちへの絶対忠誠は、ただ単にそういう風に調整された塵機ってことなんだろうが、殺人衝動は違うんだろう」

二本目のタバコに火をつける志郎の姿は、本当にただの人間にし

か見えない。

それも愛煙家だった風間志郎の情報を元に、塵機が再現しているだけの生理現象に過ぎず、やめようと思えば即座にやめることもできるだろうに。

「…なにか分かったんですか？ 志郎さん？」

「さあな。それこそ弦太郎の妹…ヒトミちゃんたち専門家が頑張っても分からないことだ。俺には勘でしかないが…殺人衝動ってのは、多分、迷いなんだろう」

「迷い？」

「他人を塵機に分解する瞬間…一瞬だけ、塵機保持者は相手の人間と繋がってる状態…人間と塵機の間が存在になるわけだろ？ 塵機保持者は…戻りたいんだよ。人間に」

その言葉をただの塵機の専門家がいうのなら、ふたりはなんとも思わなかっただろう。

しかし、その言葉は、人々を助けるために戦い、自分たちを戦士にしてくれた男の言葉で、任務の中で市民を守るために塵機保持者にされた被害者の言葉だ。

「俺もまだ人を分解したことがないのに妙にムズムズしてる、これが殺人衝動だってわかるんだよ」

「…すみません」

「何度も云わせるな弦太郎。あのとき、お前たちが助けてくれなければ、俺は今頃、全堂の命令を聞くだけの塵機の塊になってたよ…謝るな」

「でも、俺…俺…ッ！」

タバコの火を壁に押し当てて消し、志郎は立ち上がり、泣き出しそうな弦太郎を睨み付けた。侮辱でも軽蔑でもない。純粹な怒りだけを瞳に灯して。

「涙を流すな、そして謝るな。自分を救おうとするな。自分を許せないなら相手を許すな」

「…スンマセン、まだ…そこまで行けません」

「人間で有ろうとするな。俺たちクロス・ファイアは人じゃなくて良い。人を守る十字砲火になれ。人で居たいならやめろ」

黙って頷く弦太郎に、志郎は三本目のタバコを取り出した。

「人間じゃなくなった俺からの最後のアドバイスな…ああ、あと、俺は人間じゃなくなったから謝るが、悪いな。結婚式」

思い出したようにあっさりと言い切る志郎に、涙も乾いていない弦太郎が笑った。

「…大丈夫です。島本さんがスピーチやってくれるっていつてくれました…本当に残念ですけど、大丈夫です」

「俺も部下に義父さんって呼ばれてる男だから分かるが…弦太郎、今度はお前、翔一に義兄さんって呼ばれるんだぜ？ 覚悟は出来るか？」

「大丈夫だろう、義兄さん？」

バーカ、と弦太郎は笑って云った。

「…お前たちの息子がどうなるのかは気がかりだな。翔一みたいに静かなヤツか…、それか

「弦太郎みたいなウザいヤツか、ですか？」

翔一の言葉に、弦太郎はさっき泣いてたヤツがもうブチ切れそうに熱くなっている。

普通は任務の前に殴りかかるわけもないが、それでも喧嘩するのが翔一と玄太郎…そして押さえ込むのが志郎の役目。昔から。

「…たしか、兄さんみたいな息子が欲しい、って瞳美ちゃんが云ってたな？」

「え？」

「昔から骨折はしても、風邪とか病気はないだろ？ そういう元気な息子が欲しい、ってよ…前に相談しに来たよ」

どうも殴りあう気概を折られたが、それでもなんとなく収まらないのがこのふたり。

「…しゃあねえな、この任務が終わったら…ボコボコにしてやんぜ」

「ああ、いいぞ…俺たちは、死ねないからな」

ちゃんと次の作戦、全堂を捕らえて、生き残って、しっかりとやらなきゃな。

塵機に悲しむことも悩むことさえも奪われる人々、生きることが奪われた人々、不老不死なんてものを打ち砕くために。

ひとりでは勝てない敵かもしれない、だったら相棒との十字砲火で倒す。翔一と弦太郎は行く。

3月2日（日曜日） AM 5…37

気付かれないように臨界自由状態にまで分解し、相手の上を取る。そして一瞬で自分を再構築。あとは重力に任せて落下するだけ。

《うおおおおおッ！》

親友の命だけでなく、自我すらも奪った力を翔太郎は完全に使いこなしていた。

既に八手一家の四人までを撃破し、残るはたったひとり、母親のレッドのみ。そのレッドと楓も重なるダメージを修復しきれず、満身創痍。

いかに塵機保持者といえど、塵機を補充する暇さえなければ、物理的な破壊力でも倒しうるのだ。

「私は…幸せに…なるん…だ…」

辛くはない。既に家族たちへの愛情は消し去った。精神的なダメージはない。

「…あれ、えーっと…幸せって…」

ほんの一瞬の出来事。落下する翔太郎の左足に出現する赤い鋭利な刃を見つめながら楓は思い出そうとしていた。

物体は、固体から液体、気体とその温度が上がることで姿を変え

るが、炎というのは気体以上の熱量のプラズマという状態になっている。

ならば、そのプラズマという形で温度を下げる事ができればどうなるのだろう。

もちろん自然界には存在しえない状態。だが塵機ならば表現できる。燃え立つ刃で足を飾れる。

ソリッドプラズマ キイック
《固形雷打蹴撃破ッ！》

「…幸せって、なんだっけ…？」

刃となった炎が楓を両断し、次の瞬間には固形化を解除された炎によってその全身の塵機を連鎖的に燃やすことで、粉塵爆発を起こす。

ただ幸福だけを願い、祈り続けた主婦の記憶を受け継いだゴミのカケラは、跡形もなく消失していた。

《…もし、あなたが家族の恨みを晴らすために戦ってたなら…ジブンでは…勝てなかったかもしれない…》

戦いの最中、玄関を封鎖し続ける余力が八手一家にある訳もなく、さらに塵機保持者への対抗部隊であったクロス・ファイアも既に壊滅状態。

警察も周辺を形ばかりに封鎖しているだけで、病院内には人影はなかった。たったひとりを除いて。

《瞳美さん、ですか》

「思い出したの？ あたしのこと…自分のこと」

塵機に分解され、物理的な破壊力で碎かれ、ボロボロの病院の中、決着を待っていた女医。その名前は寺田瞳美。テラダ ヒトミ

寺田弦太郎の妹であり、小野田翔一と将来を誓い合った。彼女は粉塵で汚れながらも、大きな怪我もないようだった。

《いいえ、ジブンが分かるのは、以前にあなたを愛していたということだけ…男としてなのか、兄としてなのか、そんなこともわかりません》

「…じゃあ、あなたはやっぱり…兄さんか、翔一なのねっ？ ど

ちらかは生きているのねっ!？」

《そして、ジブンではない方は確実に死んでいます》

その言葉に、現実には、砂煙で汚れた頬を瞳美は自分自身の涙で洗うことになり、その場に崩折れそうになった。

それを抱きかかえたのは、臨界自由状態から即座に固体に戻った翔太郎だった。

翔太郎には分かることは、この光景は翔一も弦太郎も絶対に見たくなかった光景だということだけ。

分かるのに、今の翔太郎には瞳美に対して懐かしさのようなものは有っても、愛してはいない。

《もう、ジブンにはあなたと血を分けた肉体はないし、あなたにお兄さんそっくりの息子さんを見せてあげることできない…だから、もう、ジブンは…》

「それでも、それでも…ッ」

自分でない方は死んでいると云ったが、そもそもどちらにしても、その肉体も記憶も残っていない。

残っているのは、その人格のカケラを宿した無数の塵のような機械だけ。

《ジブンは…もう、行きます》

「…どこにッ？ あなたには…殺人衝動はないはずよッ！」

《それもなんとなく、わかってます》

きつと頑張ってくれたのだろう。翔太郎が眠っている間に調べてくれていたのだろう。

殺人衝動自体が原因の分からない現象なのだが、志郎の意見が正しいならば…。

その殺人衝動が塵機保持者が人間に戻ろうとする本能的なものだとすれば、過去の人間としての記憶を持たない翔太郎には無縁な現象ではある。だからこそ判る。翔太郎がすべきことが。

《ジブンには殺人衝動がなくとも…今、塵機保持者五人を…破壊しました》

「それは…しょうがないことでしょうっ…法律でも…ッ」

瞳美をその胸に抱きながら、翔太郎は静かに傷だらけの床に意識を集中する。

塵機保持者は、何度分裂しても元の姿に戻れる。それは元の姿を揺らぐ強くイメージできるから。

だから歳を取らないが、変身や変形はできない…だが、よほど強くイメージできるものならば別だ。

周囲の病院の破片やら何やらから、必要な元素を取り出して塵機の性能自体を変質させ、思う形に作り変える。

そこに現れたのは瞳美も見覚えが有る姿、弦太郎も欲しがっていた翔一の総排気量千二百CCバケモノ違法改造バイク、シユタルカー・ヴィントの形を再現。

以前の任務で志郎を助けるためにオリジナルは失われているし、塵機でできているのでガソリンを必要とせず、スペックもオリジナルを大きく上回っているわけだが。

《法律で殺してよければ殺していいとは…ジブンには思えません》
「でも、塵機保持者を閉じ込められる刑務所なんてないし、あなたがやらなければ…八手一家は誰かを殺し続けてたわ」

瞳美は未だに泣き続けているが、語調を強く云う。慰めているんじゃない、翔太郎を止めようとしているのだ。

《ジブンは…あなたの涙を受け止めることはできますが…止めてあげることとはできない。あなたに弦太郎と翔一のふたりを返してあげることが…できないから」

無意味な記憶だけ有っても、自分が誰かも分からなくてはしょうがない。ジャンクな記憶の中には急接近したハレー彗星を直接見た記憶がある。

宇宙を自由に飛び回っているように見える彗星で、あんな風に自由になりたいと思ったことも覚えている。

そして同じ軌道を巡航していると教えられたのがショックで、判っている…翔太郎は帰ってこれるハレー彗星を羨ましく思っている

た。

《ジブンが行きます。これから流れる涙を食い止めることはでき
ると思いますから》

それでも行かせない、そんな風に翔太郎を瞳美は離さない。涙は
止まっていないが、これ以上、兄も恋人も死地には行かせたくはな
い。

ずっとクロス・ファイヤなんて特殊部隊は辞めてくれと云い続け
て来た。それでもふたりは戦い続けた。塵機の魔の手から人々を護
るために。

だから瞳美も塵機研究の道を選んだ。人々を護るふたりを護るた
めに。

《離して下さい、瞳美さん》

「：ヤだ」

《ワガママ云わないでくださいよ》

「：ヤだ」

仕方ない、とばかりにシュタルカー・ヴィントが霧散し、続いて
翔太郎も消える。臨界自由状態。

次に瞳美が見たのは、バイクに跨ってエンジンを吹かしているガ
イコツを首に乗せた背中だった。

「：あなたが待てないなら：あたしが待ってるから！ あなたが
翔一でも兄さんでも：翔太郎でもッ、待ってるぐらいさせろっ！」

翔太郎がなにか云ったのだろうがエンジンの音で掻き消された。
しかし、それでも翔太郎は背中越しにサムズアップを瞳美の瞳に
しっかりと焼けて、警察の包囲網へとバイクを飛ばした。

シュタルカー・ヴィントは警察の包囲網を、ドリフトで強行し、
あるいは臨界自由状態ですり抜け、なんの苦労もなく離脱していく。
：警察ですら翔太郎ひとりを止められないその現実。

塵機保持者によって流される涙、塵機によって掻き消される流さ
れなければならない涙。

ひとりでは勝てない敵かもしれない、だったら相棒との十字砲火

で倒すべきなのかもしれない。

だが、今の翔太郎には、翔一における弦太郎、弦太郎における翔一が居ない。

何が正しいのかは分からない、それでもアクセルを緩めることだけはできなかった。

夢の流れ星（後書き）

締め切りの9月2日と3日が仕事で一氣に書いて、推古する時間がありません。

空想科学祭りが終わったらストーリー修正する可能性も有るので、このバージョンが好きな人はコピペとかしとくといいかもしれません。

誰かが君を愛してる

12月23日（火曜日） PM11…11

その雨は暗闇の中、ひたすらに強く翔太郎を打ちのめしていた。今日がまた終わる。

レインコートもなく、人通りも街頭も少ない裏道を走りながら、翔太郎の心は落ち着いていた。

塵機保持者となり、様々な生物的制約から解放された翔太郎にとってはバイクに乗っている間だけが休息になる。

ヘルメットを被っている間だけガイコツのような頭も隠せるし、ふいにすれ違ったり追い越す車を覗きこめば、後部座席に気持ちよく眠る子供たちを乗せていたり、見るからにクリスマスプレゼントと分かる小箱を助手席に乗せて走るドライバーも居る。

このときだけ、翔太郎も人と同じように演じられる。周囲のドライバーと言葉もなくとも、同じ流れの中に人間として参加できている。それが翔太郎にとっては嬉しかった。

通る車もない十字路交差点、信号待ちをしている間に赤信号の間だけ点くテレビ画面には、行方不明者の数が毎月激増しているというニュースが流れていき、その次に都市伝説の“ガイコツアタマのバイカー”の目撃情報が沖縄で有ったというニュース。

《：ジブン、沖縄なんて行ったこと無いんだけどなァ》

また強くなった雨足が翔太郎の眩きをかきけす。ニュースも云っているが、これは記録的な豪雨であるらしい。

シャワーのような勢いで降り続ける雨、油汚れの酷い食器とか置いたいたら勝手にキレイになるんじゃないだろうか。自分のやってきたことも洗い流してくれないだろうか。

目覚めてから九ヵ月近く戦い続け、出会う塵機保持者を次々と倒

し続けてきた。

あるものとは翔太郎を殺そうとする敵として出会い、あるものとは人間を殺そうとしている現場で出会い、あるものとは互いに塵機保持者と知らずに出会い、あるものは塵機保持者であることを苦悩し翔太郎に殺してくれと懇願してきた。

多くの敵や味方が居た。多くの人間や塵機保持者と戦い、死んでいった命。翔太郎が殺していった命。翔太郎が助けられなかった命。翔太郎の身体にも、愛機シユタルカー・ヴィントにも、歴戦の傷は一つもない。戦闘中に幾度となく破壊されてきたが、その都度、塵機によって傷口を修復する。

人間はもつとも馴染みの深い無傷な状態を覚えているもので、その認識を元に再生するため、彼らの身体には戦いの形を残すことはできない。雨が降り止まないまま、翔太郎は目的地に着いた。

《…待たせましたか？》

「いいや、俺も今着いたところよ」

夜の公園。広く草花もキレイに手入れされているいい公園だが、遊具が少ないため子供たちからの評判はイマイチ、そして見晴らしが良くトイレが遠いことからホームレスの方からも不人気。

ならば、誰にならばウケが良いのかといえば、こんな場合。男と女が夜に遭うために。

その女はあの時となにひとつ変わっていない。改造セーラー服に長すぎるマフラー、布の面積は多いのに肌の露出は多め。その女の本名は知らないが、なんと呼べば良いのかは判っている。

「話を聞くには…あんた、クロスファイアの隊員のどっちかなんだって？」

既に塵機保持者の中では翔太郎の話は有名になっているらしい。惑星番長から塵機を受け継いだ男が倒し続けているということは。

《思い出せてはいませんか？》

「俺は覚えてるけど。あんたたちふたりは、全部の敵の中でも敢闘賞ものよ？」

気軽な昔話をするように、というより惑星番長にとっては本当にそれだけの意味しかないのだろうが、その平然とした態度を受けても翔太郎の心も大きな揺れは存在していなかった。

親友や自分自身を殺した女が目の前に居ても、記憶がないせいで感情的になれない自分に対して憤るのも毎度のこと。

《：初めていいですか、雨が止んだら困りますから》

「ええ、そうね。今日は本当に良い天気：力比べにはこの上ないわ」

ハイテクの塵機といっても、しょせんは小さな機械に過ぎない。

こんな状態で臨界自由状態になりでもすれば、ひとつひとつの塵機は雨粒の衝撃や表面張力で完全に破壊される。

無論、雨粒が当たらない塵機もあるだろうが、大幅な塵機の減少は避けられない。

臨界自由状態という緊急回避がなくなれば、塵機保持者といっても真っ向から激突するしかない、お互いに逃げの手がないのだから。

「一度目は炎の中、二度目は水の中：次はどんなシチュエーションを用意してるの？」

《次はありません、ここで終わらせますっ》

言葉と同時に翔太郎の左腕を赤い炎が包み込む。燃えているわけではない。全身の塵機が少しずつ発散した熱を炎に変え、その炎を固体化させる。

物体は熱量によって姿を変える。氷を暖めると水になり、お湯を経て蒸気になる。さらに熱量を上げた姿がプラズマ体。

炎とはプラズマの最も一般的な姿であり、その熱量をそのままに固体のように固めておき、塵機保持者の全身を構成する塵機に対して一気に放出して燃やし尽くすことが可能。

多くの塵機保持者を破壊してきたシンプルな攻撃手段、それが固^{ソリ}形^{ツド・プラズマ}雷打による直接攻撃。

「いいねえ、じゃあ：そういう対決、行ってみるっ？」

惑星番長はモーションもなく、当然のように全身に赤い鎧を出現

させる。翔太郎には不可能である固形雷打で全身を覆うだけの出力が彼女の塵機にはあるらしい。

ソリッドプラズマパンチ
《固形雷打燃消拳…ッ！》

これからすることを言葉にすることで、強くイメージする。強くその炎を明確に作り出すように塵機に指令を出す。

一度でも高く、一瞬でも速く、この一撃を叩き込むために。

「それなら俺の方は、ソリッドプラズマ…ええっと…アーマー…じゃ、弱いわね。ドレス…うん。固形雷打弩烈守、こうね」

わざとらしく、固形雷打でスカート部分も作り出してみせる。全身を薄くし、概観だけのために捻出したスカート。防御力も攻撃力も落ちているはずだが、それでも片腕だけの翔太郎よりは強いだろう。

互いに間合いを詰めず、一定の距離を開けて構える。

惑星番長は翔太郎の隙を突いた攻撃を楽しみに待つ。そのために構えを変えたりしながら隙をいくつも作ってみせるが、翔太郎はその挑発に乗らない。

男を誘う女なら脱ぐに限る、とばかりに惑星番長は次々と固形雷打に薄い部分を作っていく。時にはヘソや胸元など、致命的な部分の肌を晒し、雨粒を滴らせる。

だが、翔太郎は攻撃しない。

——怖い——

こんなに力が違うなんて、翔太郎は思っていなかった。

同じ塵機保持者同士で、こんなに違うなんて…生身だった翔一や弦太郎のときでもいいところまで戦えたんだから、今なら互角には戦えるはずだった。

だが、あるときよりも惑星番長は強くなっていた。圧倒的なまでに。

——調子に乗った。他のザコ塵機保持者と一緒だと思った。悲劇のヒーローを気取った。いい気になってました。消えたくない。世界のヒーローだと勝手に思っていました、許してください、ゴメンナ

サイ、消えたくありません、どうすればいいんですか、どうすれば、なにを、速く死にたくない消えたくない壊れたくない消えたくない生きていたいカッコヨク瞳美が待って――

命乞いをしなければならぬが、そんなことをすれば惑星番長の気を悪くするだろう。怒らせてしまうかもしれないし、逆効果だ。まずこの場を生き延びなければならない、

「ねえ、俺さ、それでも女なんだけど、女待たせて楽しい？」

彼女の下駄がカカッと泥を払うようにブランコの支柱に叩き付けられ、彼女の太股の上から水滴が跳ねる。

野球拳で云えばあと二回で敗北が決まる、そんな状態まで素肌を露出させている惑星番長。恥じらいもなくゲームをしているように翔太郎を待ち構えている。

《え、あ、いや…》

「う、うあああああああああッ！？」

なんと云えば良いのかすら分からなかった翔太郎の言葉を遮ったのは、豪雨の中でも特に甲高い悲鳴だった。

ふたりが視線を向ければ、そこにはレインコートを羽織って腰を抜かしためがねを掛けた中年男性と、その男にそっくりなめがねを掛けた女の子だった。

「…ちよっとお。グズグズしてて邪魔まで入るとか…冷めるわ」

ちっとも冷めている様子のない固形雷打の一部を分離し、両腕に一本ずつの大振りなナイフとして定着させる。

《逃げてください、頼むから！》

逆効果だ。こんな状態で翔太郎のようなガイコツアタマの怪人がこんなことを云っても混乱させるだけ。

既にその親子らしいふたりには、ずぶ濡れになった身体を引きずってこの場から離脱するだけの気概はない。

そんな親子に惑星番長は、面倒な仕事を押し付けられたように、さっきまでのテンションから一転して、ひどく退屈そうに炎のナイフを投げつけた。

——護れるッ、ジブンも固形雷打を分離して投げるか…それなければシュタルカー・ヴィントを遠隔操作すればいい、助けられる、助けるよッ！——

翔太郎が頭の中で自分のすべきことを反芻する間に、炎のナイフは親子に突き刺さった。一本は狙い通りに父親に、もう一本は混乱しながらも娘を庇った父親にダメ押しとして。

《あアアアアアアッ！》

身体が動かなかったのか、心が動かなかったのか。そんな理由を考えている時間はない、今度こそ動かなければならない。

翔太郎は泥の中を這うように進み、親子の下へ行き、父親の腕の中から娘を引きずり出した。

「お父さっ、お父さァんッ」

娘さんの言葉に応えることはなく、父親の肉体は固形雷打の特性によって燃え出し、灰も残らず、残ったとしてもこの豪雨が全てを洗い流していく。

ひどくあっさりとした、何事もなかったかのような死だった。

「や、やあああああッ！ 父さ、お父さァーッ！」

「うるせーよ。お前らみたいなゴミなんて俺だって殺したくねーよ」

本当に面倒そうに惑星番長は炎のドレスの形を修復しつつ云う。ナイフとして投げた分なんて彼女にしてみれば減っていないも同然。露出が増えた様子もない。

《逃げてくれ、な？ ここは危ない、だから…逃げてくれよ、こは俺が…私が、なんとかするからッ！》

翔太郎には既に当初の惑星番長を倒そうという意識は消えており、自分も死にたくないが、それ以上に自分の前で誰かに死なれるのが嫌だった。

これ以上、誰の涙も見たくなかった、だから死を覚悟で戦いを挑む…聞こえはいいが、翔太郎のその思いはただの逃避。

《な？ 歩けるか？ 歩けるだろ？ 速く逃げ…て、く…れ？》

腕の中の少女は、涙を流していなかった。

それどころか、明確にその瞳の中に殺意を燃やしている。父親を奪った翔太郎と惑星番長に対して。

どこかで翔太郎も知っている。覚えがある。記憶がある。今の翔太郎よりも強く輝くそれ。

「ねえ、俺も続きをさっさとやりたいんだけど…」

《シユタルカー・ヴィントオーツ！》

愛機を塵機で遠隔操作し、翔太郎は強引に少女を乗せようとするが、少女は何をされるかと思っただけか、暴れる。

《さっさとここを離れろ！ お前の親父の死を無駄にしたいのかッ？》

言葉は通じないのは翔太郎には判っている。大事な人が目の前で死んだときに他人の言葉が耳に入るわけがない。

そう、判っている。思い出した。翔太郎はこの少女の瞳を知っている。“かつて自分も同じだったから”…だからこそ死なせない、思い出させてくれたこの娘を。強引にベルトで巻きつけるようにし、翔太郎はシユタルカーヴィントを走らせていった。

「…で、初めていいのよね？」

《ああ、掛かって来い。あのときの…続きだ》

自分が許せなかった。

毎日してきた自己嫌悪だが、その中でもぶっちぎる自分を殺したいほど…少女の眼は、あのときの自分自身の眼だ。

怒りだ。憎悪だ。憤りだ。理不尽な出来事に対して、心の温度が上がりすぎてプラズマ化するような…あれを見るまで忘れていた、そんな自分に腹が立つ。

親友はなんのために死んだんだ？ 瞳美を幸せにするためだろうか？ それなのに彼女を置き去りにして戦い、そしてあの惑星番長に

命乞いをしようとしていた自分。

今までの小野寺翔太郎という殻を打ち壊す、不健康なほどの心の動き。間違はなく削除しなければ正常ではいられないほどの感情。

——そうか、だからジブンは記憶を失っていたのか。こんな怒りが有ったら：おかしくなってたな——

塵機の自己防衛機能。ぶつける対象のない感情は肉体をも破壊する。

惑星番長という捌け口がない状態で、これだけの感情だけが有ったなら：結果は惑星番長以上怪物が誕生するか、翔太郎の死を意味していただろう。

《アアアアアマアアアアゾオオオオウッオ！》

怒りを熱量に変換するイメージ。感情を爆発させる。翔太郎の心がデータとしてひとつひとつに記録されている塵機が、その熱量をプラズマとして発散していく。

樹木が枝分かれして生えるように、固形雷打が伸びていく。その熱は周囲の雨粒を蒸発させ、公園内をどんどん溶かしていき、もちろん、惑星番長のドレスなんて比較にはならない。

「あーあ：負けちゃったか：いいよ、あんたにならやられてもいい。俺が弱かったんだもんね」

死への恐怖も既にないらしく、惑星番長は逃げもせず、全身が溶けていく中でも平然としている。

《：お前：死ねると思っっているのか？》

「は：：？」

《塵機は全体でひとり：ひとつでも本人そのものだ。だから：お前の塵機をひとつ、そのままジブンの中に取り込ませてもらう》

そう云った翔太郎の体内では、今まで倒し取り込んできた無数の塵機保持者たちがひとつずつ残っている。

最初は情けのつもりだった。一片でも残っていれば残っていれば死んだことにはならないし、その方が翔太郎も楽だった。

しかし、違うのだ。取り込まれた塵機保持者たちは全く同じリア

クシヨンを取り続けた。

「冗談でしょ、翔太郎：ッ？」

《本気だよ》

既に翔太郎の熱で多くの塵機を失い、辛うじて頭部だけで形を保っている惑星番長の元々血なんて流れていない顔から血の気が引いていく。

固形雷打を生み出そうと暴れまわるが、もう遅い。

「い、いやああああッ！ いや、いや！ 殺す人間の居ない空間なんて：殺せる腕もないなんて：や、やめ、アアーッ！」

《お前は：ジブンの中で苦しみ続けるだけの塵になれ。 考えるしかできない、人を殺すことしか考えられない、狂うことも死ぬこともできないまま》

だからこそ翔太郎は消し続けてきた。無数の塵機保持者たちと対決し、相手を消し去り続けてきた。

死ぬことだけが救いだとは思ってないが、不幸でないことが幸福だとするならば、塵機保持者たちにとって消滅は幸福なのかもしれない。

「待って！ 俺、知ってるよ、あんたが：誰なのか！ 教えて欲しくない：驚くと思うよ、あんたは、なんと」

静かに、翔太郎は惑星番長の口に手をやった。

《：どっちでもいいよ。どっちにしてもジブンは：誰も幸せにできない》

そのまま翔太郎は口を塞いだ手を基点に、惑星番長の全身を燃やし尽くし、眼には見えない微小なひとかけらを体内に封じ込めた。

自分が弦太郎だろうと翔一だろうと：そして、それ以外でも、彼のすることは変わらない。

《あと：三百九十八体》

一週間前に出会った幻魔大聖を名乗る塵機保持者から教えられた技で、この地球上に残る自分と共鳴する塵機の種類を感知する技能。量子リンクの波長係数を利用する技だそうで、原理的には宇宙の果てだろうとなんだらうと見逃すことはないらしい。

雨が上がリ、夜が明け、シュタルカー・ヴィントはあの少女をどこか安全な場所に降ろし、戻ってきていた。

《なるほど、時間がない、ってわけだな》

親友の死に様を思い出したとき、そのデータによって翔太郎は自分を構成している塵機たちが変質していくのを感じて理解していた。

翔太郎は記憶がないからこそ人間に戻ろうとしないから殺人衝動がない、少なくとも翔太郎はそう認識していたが、僅かながら記憶を取り戻し、はたしてこれからも無事にヒーローでいられるのだろうか。

いかなる種類の苦痛も快感に変換する塵機精神外科手術。ナノ・ハートクリア

だが、その技術は人間の正義と平和を破壊し、人間を全自動殺人機へと変えることを可能としていた。

小野寺翔太郎（仮名）は、塵機によって親友の命と己の記憶を奪われながらも、人類の自由のために謎の全堂電器を相手に戦うべく、敢然と立ち上がった！

行け、仮面バイカーッ！

行け、スカルライダーッ！
行け、誰^{ネモ}でもない男ッ！

いつか自分を取り戻したとき、泣くことや幸せを、自らの意思で
掴み取るために！

誰かが君を愛してる（後書き）

後半、某光の国の巨大宇宙人の曲ばかり聞きながら書いてた。
平成組はヒーローソングっぽくないカッコイイ曲も多いので、こ
っちもオススメ。

あとがきは←

[http://mypage.syo
setu.com/mypa
geblog/view/
userid/90594/
blogk
ey/263386/](http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/90594/blogkey/263386/)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097w/>

FORGET FACE～忘顔～

2011年9月30日14時53分発行